

9月19日「光の子として」マタイ19：16～30

「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を捨てた者は皆、その百倍も報いを受ける」今日、聴いたこれらの言葉は私たちをととも困惑させます。そんなこと出来るのか？私はカルト宗教への対策を行っている弁護士と宗教者の勉強会に出たことがあります、「信仰心」を利用して財産や人間関係をすべて奪ってしまう恐ろしいカルト宗教もありますので少し警戒的になってしまいます。もちろんイエスがそのような意図で発言したはずはありません。イエスの弟子にはペトロとアンデレ、ヤコブとヨハネ、マルタとマリアとラザロのように家族単位で弟子になる人たちもいました。イエスの母マリアは十字架の最後まで見届けていますので、イエス自身が家族を捨てたわけではありませんでした。また、例えば十字架に付けられたイエスのために墓を用意したのは、アリマタヤのヨセフというお金持ちでした。ほかにもお金持ちの弟子はいたでしょう。つまり、イエスの弟子になる条件が、家族を捨てることや、資産を放棄することではなかったはずですが、ではなおさら、この言葉の真意は何なのか・・・？注意深く考えたいと思います。

さて、物語はこうです。ある金持ちの青年がやってきて、イエス様に尋ねます。「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか。」文章から伝わってくるのは、彼は非常にまじめな青年だということです。律法を守って正しく生きています。一方で、彼は何か自分自身の生活に不満、というか足りないものを感じていたのでしょうか。もしかしたら、イエス様と出会いビビッと来たのです。「この人だったら自分に欠けた『何か』を埋めてくれるかもしれない」そう思って質問しました。イエス様はこう答えられました。「もし命を得たいのなら、掟を守りなさい。」「どの掟ですか？」青年は聴き返します。きっと今まで誰にも聞いた事のないような特別な掟を期待したのでしょうか。ところがイエス様の答えは彼には期待外れのものでした。「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。』」いわゆる十戒です。異邦人ならまだしも、ユダヤ人であれば、子どもでも知っているような常識

です。青年は見くびられたとでも思ったのでしょうか。「そういうことはみな守ってきました。まだ何か欠けているのでしょうか。」もう一度質問します。そこでイエスは言われました。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物  
を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」青年は大きなショックを受けました。そして悲しみながら立ち去りました。彼にはたくさんの財産があったからです。

この物語を理解するには、当時のユダヤ教の常識を私たちは知っておく必要があります。今は「清貧」という言葉もあり、貧しさが清さとされる面もありますが、当時は全く逆で、金持ちであることこそ、神さまからの祝福であると考えられていました。商売や何かで成功して大きな富を持つこと＝その人が神さまの前に清く正しく生きているから祝福を受けている証拠だったのです。逆に、貧しかったり、病や障害を負っていることは本人か家族の誰かが神さまの前に罪を犯したので罰が降ったと考えられていたのです。このことを理解すると、この後のイエスと弟子たちとのやり取りの意味も分かるかと思います。「金持ちが天の国に入ることは難しい」とイエスは続けて言われますが、弟子たちは「それでは誰が救われるのだろうか!？」と驚き戸惑います。金持ちこそ、神の国に最も近いと思われていたからです。

このことを前提に、金持ちの青年がなぜ真剣に神の国を求めていたのか、その動機を考えてみましょう。もしかしたら「今の身分を維持したい」「ずっと金持ちのままでいたい」という自己保身が神の国を追い求める動機の根底にあったのかもしれませんが、それがまさにこの青年を「正しさ」に駆り立てるけれども、一方で、いつも何かに欠けていて、どこか満たされないと  
思わざるを得なかった事柄だったのかもしれませんが。パウロはローマ書で「正しい者は一人もいない(3:10)」と語っています。「律法を  
実行することによっては、誰一人神の前で義とされないからです。律法によっては罪の自覚しか生じないのです」と。だからこそ、パウロが至ったのは、「行い」ではなく、キリストへの「信仰」によって救われるということでした。金持ちの青年もパウロと同様に、真剣に律法を守っていましたが、

正しくあろうとすればするほど、そうではない自分自身（罪の自覚）と出会わされ、何か空しい日々を過ごしていたのかもしれませんが。彼がいつも現状に不安を抱え、永遠の命を求めているのはそういうことかもしれません。イエスはそのことを鋭く見抜いて言われたのではないのでしょうか？  
「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」それは、あなたが囚われている「富への執着」から自由になりなさい！という意味だったのです。それが不安や恐れから解放されることだとイエスは伝えられたのです。

私自身、牧師になろうかどうか悩んでいたことの一つに経済的なことがありました。父の姿から学んだことは、牧師になる＝経済的に豊かになることは決してない！ということだったからです。けれども、大学院の1年の時に夏にアメリカの小さな日本人教会を回らせて頂きました。とてもショックだった。皆全く裕福ではない。特にアメリカでは小さな教会。でも、どこか楽しそう、気楽そうなのだ。そこで、分かったことは、幸せなことと裕福なことは必ずしもイコールで結ばれていないことだった。そこで、牧師になる決意が固まった。お金は少なくとも何とかなる！そこで気楽になれたことを覚えています。肩の荷が下り、解放されたことを。

私たちは何かに縛られて生きています。一般の良識に従えば大切にしなければならないものでもそれが重荷となっている人はいるだろう。例えば「家族」の大切さは改めて説くまでもありません。「父母を敬え」と十戒にもある通りです。けれども家族が必ずしも幸せの根源ではない場合もあります。今、私は少年院に行っていますが、そこでは親から虐待などの酷い扱いを受け、大きな傷を負っている話をよく耳にします。それでも彼女たちは家族に囚われ、何とか親から愛されたいと願っています。私は思うのです。彼女たちが立ち直るのには家族から解放されることが必要だと。イエスは「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を捨てた者は皆、その百倍も報いを受ける」と言われます。この言葉にショックを受ける人も居るでしょうが、同時に、救われ、解放された人も居たでしょう。社会一般にとっては決して捨てられない価値あるものであったと

しても、あなた自身にとっては重荷となっているモノからは時に自由になっても良いという解放の宣言だったのです。

今日の物語で青年は「悲しみながら立ち去った」と言われています。結局、彼は自分を縛るものに気付けなかったのかもしれませんが、もしくは、自分が執着して、囚われているものをはっきりと見抜かれたことへのショックがあまりにも大きかったのかもしれませんが。彼には、そうした自分の弱さ、罪と向き合って、イエスに従うという新しいアイデンティティに生きることが出来なかったのです。

神に従うとはある意味でそうやって自分の固執してきたものを捨てることを意味する面もあります。453番はこんな歌詞です。「何一つ持たないで わたしは主の前に立つ 主の恵みがなければ ただ死ぬほかない命 あなたが約束する未来 待ち望む 私」この心境に至ることが信仰なのかもしれません。「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。」とはヨブ記の言葉ですが、結局、神の国には私たちはこの世の何も持っていくことが出来ないのです。神さまの元へ持っていける可能性があるとするればそれはただ一つ、信仰のみです。ある面では私たちが信仰しながら歩むということは少しずつ執着を捨てていく歩みではありますが、同時に、荷が軽くなり、解放されていく歩みともいえるのです。

今日は高齢者祝福式です。松尾コツルさんのことを思います。先日も行く機会がありましたが、「元気？」と聞くといつも「息しとる」と言われます。彼女はもう何ももっておられません。足もない。介助する人が居なければ、今日一日すら生き延びることが出来ません。それなのに、コツルさんはすべてを持っておられます。神さまからの祝福がこの方に息づいていることを知らされます。本当に凄い方です！そして、今日お祝いする週報に名前のある方々もまた、神に従い、歩んできた方々です。日本で信仰者として生きることある程度、何かを捨てる歩みだったでしょう。それでも、解放され、受け取る恵みの方がきつとはるかに多かったことでしょう。その信仰の歩みを祝福し、これからもその歩みを神さまが支えてくださるよう共に祈り合いたいと思います。